

# 包摂的なセクシュアリティ教育モデルの構築に向けた予備的研究 —ESDの観点を踏まえて—

鶴岡尚子（和歌山大学教育学部附属特別支援学校）

西倉実季（和歌山大学教育学部）

## 1. 研究の背景と目的

小畑・鶴岡・古井（2020）は、知的障害のある人が特別支援学校で学んだ性教育についてどのように認識しているのか、性教育において何を学びたいと考えているのかなど、教育の効果とニーズを明らかにし、性教育を実施するうえでの今後の課題を提示することを目的としている。特別支援学校卒業生である知的障害のある2名の女性へのインタビュー調査の結果、性への興味や関心の程度と周囲の環境から得られる情報量に差があること、在学中に学んで役に立っているのは「生理」に関する知識であること、妊娠の可能性を理由にセックスを過度に恐れていることが明らかとなった。これらの成果を踏まえ、①相談相手を含めた正しい情報の入手先の確保、②妊娠に対する強すぎる不安への対応、③性を人権として捉えるための教員や保護者らの意識改革と環境整備を課題として見出し、対応していく必要性を主張している。

本研究の目的は、ESD（Education for Sustainable Development）の観点から、包括的概念であるセクシュアリティをめぐって知的障害のある人が置かれた状況を把握したうえで、特別支援学校在学中にいかなるセクシュアリティ教育が必要かを検討することである。具体的には、小畑・鶴岡・古井（2020）の知見をさらに深めるため、知的障害のある女性たちが先述のような認識や態度をもつに至った背景の分析を試みる。この作業は、附属特別支援学校で取り組んでいる包摂的なセクシュアリティ教育モデルの構築に向けた予備的研究として位置づけられる。

## 2. 研究の対象と方法

小畑・鶴岡・古井（2020）が扱ったインタビュー・データを個々のライフストーリーの視点から再検討した。具体的には、彼女たちの中にある「恋愛関係では男性がリードするもの」、「男性は性欲が強い」、「セックスは子どもをつくるためのもの」といった価値観の形成に影響を与えたものを明らかにするため、学校教育との関連も考慮しながら、追加のインタビュー調査とそこで得られたデータの分析を実施した。

インタビュー・データの収集・分析にあたっては、ライフストーリー法を採用した。ライフストーリー法は、個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）に焦点をあわせ、その人自身の経験をもとにした語りから、個人の生活世界や社会・文化の諸相と変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つである（桜井 2012）。この手法は、語り手がいかに自分の人生を解釈しているのか、自らの行為の理由や動機をどのように理解し、他者に説明しようとしているのか、個人の行為や価値観をその源泉にまでさかのぼって理解した

いときに用いられる。本研究においては、知的障害当事者が学校教育や日常生活をどのように経験し、様々な価値観をどのように形成してきたのか、彼女たちがそのライフを生きてきた過程や彼女たちを取り巻く生活環境や社会状況も考慮に入れながら検討することが可能となる。

インタビュー対象者は、知的障害の程度が軽度であり、言葉でのコミュニケーションが十分可能な卒業生の女性（Aさん・Bさん、いずれも20代前半）である。調査の目的や方法のほか、インタビュー・データは個人情報が入らないように編集し、研究目的以外には一切使用しない旨を説明した。また、研究への参加は任意であり、同意した場合であっても個人の意思に基づいていつでも同意を撤回することができ、インタビューの途中で中止することができる旨も説明した。以上の手続きを踏んで同意を得られた対象者に来校を依頼し、半構造化インタビューを実施した。

### 3. 考察

本稿ではページ数の都合上、具体的な語りの内容は省略し、彼女たちのジェンダー観の形成についての考察を提示する。

まず、「恋愛関係では男性がリードするもの」という価値観はいかにして作られたのかを考察する。Aさん、Bさんともに、中学時代に見た恋愛模様を描いたドラマや映画、アニメ等のマスメディアの影響が大きいことが分かった。そこで描かれる恋愛関係に憧れ、それは男性が主導権をもつ関係であったために、意図せずそのような関係が当然という価値観を内面化していったのである。

これまでのジェンダーとメディア研究においては、性差別的な表現の偏りが社会のジェンダー構造を再生産することが認識されている。井上（2009）は、日本が文化同質性の高い社会であるがゆえに、メディアが流布する情報・認識・イメージの支配力の大きさは格別であることを指摘し、メディアによる性別の画一的な描き方への批判は、日本においてこそ必要であると述べている。

また、「子どもでもない大人でもない思春期は、他者の視点から世界を作り、その世界から自己を再び作り直す時期の最中」（澤田 2017 p.108）にあり、社会からの影響、特に所属する仲間集団の影響を受けやすい時期である。メディアや友人から受け取る情報にバイアスがかかっていたり不正確であったりしても、自己形成に対する他者の影響力が大きい時期には、同質性が作用することで、それらを当たり前のものと意味づけ内面化してしまう危険がある。知的障害があるために友人とコミュニケーションをとることや、情報を取捨選択して批判的に検討することに困難があれば、メディアや友人からの情報を鵜呑みにしないことは一層大きな課題となるだろう。

次に、Bさんの、交際相手とキスやセックスに至るまでの主導権を「男に任せる」と考えていた関係の危険性について述べる。

まず、今日の男性優位の男女関係のもと、Bさんのように「男に任せる」という考えをもつことは、性の主体となっているとはいえ、性被害とも紙一重という危険がある。良

(2017)によれば、「親密な関係のなかにジェンダー・バイアスがあると、対等平等であるはずの関係に主従、上下関係が発生しやすく、それがDVやデートDVに発展することも少なくない」(p.110)という。また、女性のDVやデートDVの被害経験率、男性の加害経験率が高いことが報告されているが、これにはジェンダー・バイアスを社会の常識と勘違いすることによる問題の温存や、女性がケア役割を担い、男性は女性をリードするという日本のジェンダー・バイアスの根深さが関連しているという。さらに、普段は男女平等の意識をもつ女性たちであっても、いったん恋愛関係になると男性からの評価が気になり、嫌われたくないとの思いから、たとえ相手が暴力的でも「従順で、受容的な女性でなければ」といった性別役割にとらわれてしまうという指摘もある(小柳 2015)。実際、初交経験時に「自分から」要求し、性行動において主導権をもった女子はかなり少数であることが明らかになっている(俣野 2018)。

Aさん、Bさん共に、「恋愛関係では男性が主導権をもつもの」という価値観をもっていているが、その一方で、知識としては「恋愛は2人の協力で成り立つもの」と理解しているためか、「(恋愛関係を進めるのは)お互いなんかな」とも語る。しかしながら、先述のような指摘を踏まえるならば、実際はその知識に基づいて行動することには困難があると考えられる。

正しい知識をもっているにもかかわらず、それを性行動において実践できないという問題は学校教育のみで克服できるものではないだろう。しかし、メディアの中に潜在化しているジェンダー・バイアスを認識し、そこで描かれる人間関係を批判的に見る視点を得ることは、自分の権利が侵害され理不尽な状況に置かれたときに、それに気付いたり自分の行動を判断したりする手掛かりとなると考えられる。

#### 4. 今後の課題

ここまで得られた知見をもとに、特別支援学校における包括的性教育の進展に向けた提案として、メディアの情報をジェンダーの視点から批判的に見る学習機会を提供することと教師がジェンダー平等の視点をもつことの必要性について述べる。

AさんとBさんのジェンダー観に影響を与えたのは、中学生の頃に見ていた恋愛を描いたドラマ、映画、アニメなどのマスメディアである。その中で描かれていた恋愛関係において男性が主導権をもつ様子に憧れ、それが当然という価値観を内面化していった。問題なのは恋愛に憧れること自体ではなく、メディアから受け取る情報を無批判に受容することである。そのことによって、「恋愛はすばらしいことだ」、「恋愛すると人間的にも成長する」、「恋愛に関心がない=さびしい人」という考え方(恋愛至上主義)に偏ってしまったり、メディアが描くジェンダー・バイアスを内面化したりするためである。

日本の学校教育においては、恋愛について学ぶ機会はきわめて少ない。特別支援学校においても、教師は交際や結婚の問題を扱いにくいと考えているという調査結果がある(菅沼・生川 2013)。しかし、知的障害のある人も恋愛や家族形成も含む多様なライフコースを生きる権利をもつ主体であることを考慮すると、これらを含めた包括的なセクシュア

リティ教育は必要不可欠である。こうした教育の中で、片思いがあってよいことや同性間の恋愛があること、また恋愛をしなくてもよいことや交際していてもセックスしなくてもよい関係があること等々、多様な関係性があることを知ると同時に、メディアが描く関係をジェンダーの視点から批判的に読み解くような授業を展開する必要がある。

その際に重要となるのは、教師自身が性に関する言説に対してジェンダーの視点から常に批判的思考を働かせておくことである。そのためには、教師が自分の中に内面化してきたジェンダー規範に対して内省的でなければならない。自分自身のジェンダー規範を意識化することで、子どもたちの中に形成されたジェンダー規範に気付いたり、学校の中に存在するジェンダー・バイアスのかかった思い込みを見抜いたりすることにも繋がると考えられる。

今後の課題としては、以下の2点があげられる。1つは、さらに事例研究を重ね、ライフストーリーの分析を行うことである。他の女性や男性の卒業生も対象としたインタビュー調査を実施することで、男女で異なりうる経験の様相や学校教育の課題が明らかになり、ジェンダー規範の影響に関する考察をより深めることができるだろう。2つ目は、今回得られた知見を特別支援学校での性教育プログラムの体系化に活用することである。そこから授業実践として具現化し、その効果的な授業の在り方まで探っていくことが必要である。

## 文献

- 小畑伸五・鶴岡尚子・古井克憲（2020）知的障害特別支援学校における性教育に関する研究 卒業生を対象としたインタビュー調査から、日本特殊教育学会第58回大会ポスター発表
- 桜井厚（2012）ライフストーリー論、弘文堂、pp.17-16
- 井上輝子（2009）メディアが女性をつくる？女性がメディアをつくる？、新編 日本のフェミニズム7 表現とメディア、pp.2-36、岩波書店
- 澤田匡人（2017）中学生・高校生（青年期前半）の心理学、発達心理学、太田信夫監修、二宮克美・渡辺弥生編集、北大路書房、pp.105-123
- 良香織（2017）デートDV、ハタチまでに知っておきたい性のこと第2版、橋本紀子・田代美江子・関口久志編、大月書店、pp.107-118
- 小柳しげ子（2015）悩む一移りゆくジェンダー観のはざままで、ジェンダーで学ぶ社会学、伊藤公雄・牟田和恵編、世界思想社、pp.161-174
- 俣野美咲（2018）初交時の避妊の状況とパートナーの影響―「同い年」の増加と勢力関係、青少年の性行動はどう変わってきたか―全国調査にみる40年間、林雄亮編、ミネルヴァ書房、pp.80-101
- 菅沼徳夫・生川善雄（2013）知的障害児の性教育に対する特別支援学校教師の意識に関する多次元的研究、了徳寺大学研究紀要（7）、pp.59-70